

外国語を“語る”

- 自分で見つける中国語のルール -

田邊 鉄^{*1}・清原文代^{*2}・山崎直樹^{*3}

Email: ttanabe@iic.hokudai.ac.jp

- *1: 北海道大学情報基盤センター
- *2: 大阪府立大学高等教育推進機構
- *3: 関西大学外国語学部

◎Key Words 外国語教育, 動機付け, ゲーム型教材

1. はじめに

大学の第二外国語(初習外国語)教育は、LL教室を舞台としたオーディオ・ビデオ・メソッドによる音声言語注入から、コミュニケーション能力の養成へとシフトし、近年はICTを活用したネットワーク型のアプローチへと進化を遂げようとしている。これら各種アプローチに共通するのは、「誰かと話したい」「旅行したい」「役に立つと思って」といった、“実用への期待”を、大多数の学生が持っていることを前提としている点である。

実際、新入生に対するアンケートで、中国語の履修理由を聞くと、「(経済的に)関係が深い国なので、いつか役に立つ」「中国人と話してみたいので」といった回答が目につく。だが、だからといって、これらを直ちに「学生のニーズ」と捉え、「中国人と話してみよう」ということを目標とした授業をすればよい、と言えるだろうか。大学で実用会話を学ぶ意味がないとは言わないが、外国語を学ぶ生活上の必要も、実用の機会も欠く日本の大学生が、それだけで外国語を学ぶモチベーションを維持できるとは思えない。日本では、外国語を役立てる「いつか」が一生来ないこともあり得るからだ。裏付けのない薄っぺらな目標のために、人が何かに「のめり込む」ことはない。

大学の外国語授業は「実用語学を身につける」ことを目的にする必要はない。むしろ外国語を学ぶという体験そのものを、じっくり丁寧に味わい、「外国語」を知識として「語る」ことを通して、他の言語・文化に対する寛容の態度を養うこと、すなわち「異文化間能力」を身につけさせることこそ、大学にふさわしい外国語授業のありかただと考え、その方法を開発・検証する研究を着想した。

2. 研究の目的と期待される成果

本研究の目的は、大学の第二外国語(初習外国語)教育において、外国語の規則を自分で発見して、ことばのメタな情報を、「マニアックな知識」として語れるようになるための授業と、それを支援するオンライン学習システムを開発し、効果を検証することである。本研究の成果により、当該外国語に対する「偏愛」や、母語である日本語の相対化を促し、多言語・多文化共生意識を飛躍的に高めることができると思われる。

3. 開発と運用の概要

以下のように、第二外国語としての中国語教育における「発見学習」を支援するオンラインツールを開発し、授業を実施した。

3.1 学習者観

今回対象とするのは、北海道大学で「中国語Ⅰ」を履修する1年生のうちの、2クラス合計69名である。全員、大学入学前には体系的な中国語学習経験はないが、1名は高校時代に2ヶ月の中国滞在経験があり、その際、中国人から簡単な会話を習っている。今年度から「総合入試」が実施されており、大半の学生は、まだ学部には所属していない。両クラスの**最初の授業**で実施した。

3.2 学習目標

- (1)中国語の基本動詞である「吃(食べる)」「看(見る・読む)」「喝(飲む)」などを使った、SVO型の構文を発見する
- (2)主述述語文の仕組みを発見する
- (3)前置詞「在」を含む、やや複雑な文の規則を見出し、英語と中国語・日本語と中国語の相違と相似を発見する

3.3 支援ツール

支援ツールは、文法規則を自分で発見するための2つのタスクと、発見を短いことばで発信・クラスで共有するミニブログシステムからなる。タスク部分はFlashを用い、ミニブログ部分はPHPとJavaScriptを用いている。いわゆるLAMP環境であれば、全てのファイルを公開ディレクトリに展開し、ミニブログの記録用データベースを設定するだけで使うことができる。

各タスク部分は、1枚に1つの単語が書かれたカード様のグラフィックスを、ドラッグ&ドロップすることで操作する。本システムで行う学習の全ての過程で、日本語訳は常に確認可能である。

(1)タスク1: 単語のグループ分け

ばらばらに配置された9ないし12個の単語を、ド

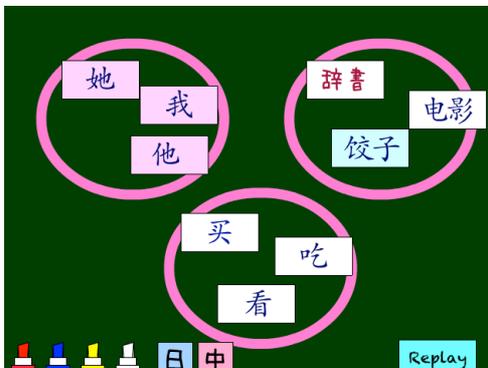
ラッグ&ドロップによって、たとえば、主語になるもの、述語動詞、目的語になるもの、といった3グループに分ける。動詞文はSVOという発見が期待できるほか、

我	教	他
---	---	---

 (私は彼に教える) という文を、

他	教	我
---	---	---

 (彼は私に教える) へと展開することは容易であるため、「格変化しない」ことも発見できるだろう。



(2)タスク2：語の並べ替え

単語が書かれたカードを、ドラッグ&ドロップによって並べ替えて、文を完成させる。各カードは日本語と中国語の表示を、どの段階でも切り替えることができるので、たとえば、「中国語で正しい語順の文を、単語を日本語に置き換えてみる」ことによって、文の構造に気づくことが期待できる。



(3)発見した規則を随時「つぶやく」(tweet)

いわゆる「ツイッター」同様のシステムを内蔵している。ツイッターそのものでつぶやくことを検討しているが、今回は閉じたシステムとする。

4. 学生の「つぶやき」

以下、「她在图书馆看书」(彼女は図書館で本を読む) という文でタスク2を行った時のつぶやきをとり上げる。

- (1)日本語と同じ語順ではない
- (2)英語のようにS+V+Oになっている
- (3)英語のSVOと異なり、「図書館で」が先に来る
- (4)英語の語順を、日本語に近い語順になるように並べ替えたもの She

read a book	at the library.
-------------	-----------------

 → She

at the library	read a book.
----------------	--------------

- (5)漢文と似ている (返り点があれば読めそう)
- (6)隣同士の単語を補い合うように入れ替えると日本語の文法にあったカタチになる
- (7)前置詞が前、動詞が前、目的語となる名詞が後
- (8)副詞が主語のあとにある
- (9)日本語の助詞「は」がない
- (10)「で」があるのに「は」や「を」はない
- (11)活用がない
- (12)日本の漢字とは違う
- (13)図書館の「書」と、本という意味の漢字が同じ
- (14)読むが「看」なのは不思議
- (15)後ろから前に修飾する
- (16)補語の後に動詞がある
- (17)動詞の位置が日本語とも英語とも違う
- (18)彼女以外は2単語ずつ逆になっている
- (19)同じような意味の漢字は、同じものに統一

中国語は意味が語順に依存する言語である。(1)~(8)は、日本語・英語・漢文との関係から、ほぼ正確に中国語の姿を捉えている。特に(4)は稚拙な表現ではあるが、文を語単位ではなく、意味のかたまり(チャンク)単位でとらえることによって、日本語との近縁性を示しており、独力で相当な理解に到達していることがわかる。(9)~(11)も、日本語との比較によって、中国語の特徴を浮かび上がらせることに成功している。

(12)~(14)は、漢字表記の問題である。中国語の簡体字について知識がない状態なので、日本語と違うことはわかっても、字体の違いと語彙の違いを区別できていない。

(15)~(19)は、中国語または文法一般の規則の記述として、適切と言い難いものである。そのまま覚えられると困るが、もとより学生本人が「全て正解」だとは思ってない(まだ勉強していないから)ので、独力でここまでたどり着いたことを評価すべきだろうと考える。

5. おわりに

授業の結果から、多くの学生が、システムの提供する情報だけを頼りに、独力で簡単な文法規則を発見できていることがわかった。

今後、学生の「つぶやき」をクラスあるいは学年等の単位で共有し、いわゆる「集合知」を活用することによって、より難度の高い課題も、同様に解決可能であることを示したい。

本研究は学術助成基金助成事業(課題番号23501090)の助成を受けて実施されたものである。